

第三回男女共同参画大規模アンケート



佐藤絵理子

大阪市立大学大学院工学研究科化学系生物系専攻
[558-8585] 大阪市住吉区杉本3-3-138
講師, 博士(工学).
専門は高分子合成, 界面科学.
sato@a-chem.eng.osaka-cu.ac.jp
www.a-chem.eng.osaka-cu.ac.jp/polymer/

index.html

2012年11月1日から12月14日に行われた「第三回科学技術系専門職の男女共同参画実態調査」(通称、第三回大規模アンケート)の解析結果が2013年8月に公開されました。大規模アンケートとは、男女共同参画学協会連絡会(オブザーバーも含めて80以上の学協会が加盟、高分子学会も設立当初から加盟)によって実施されている男女共同参画に関する大規模な意識調査で、調査結果に基づく政府への提言や要望活動も行われています。第一回は、「21世紀の多様化する科学技術研究者の理想像—男女共同参画推進のために—」と題して2003年に行われ、今回で第三回目となります。「男女差」だけでなく「正規雇用・非正規雇用」の観点からも継続的な調査を行っており、今回は「介護」に関する設問が新設されました。高分子学会では、729名(うち、男性570名、女性159名)と多くの会員の方にアンケート回答にご協力いただきました。以下に、結果の一部をご紹介します。

第三回大規模アンケートの全回答者数は16,314名(うち、男性11,958名、女性4,356名)で、前回と比較して15.6%の増加となっていることから、関心の高まりがうかがえます。アンケート調査は、「役職などの男女差」、「子育てと介護」、「任期付き職、ポスドク」、「政策認識」などに関して行われました。

「役職などの男女差」では、職位が高いほど女性比率が低下する、女性のほうが収入や研究開発費、部下人数が少ないといった一般的にも認識されている傾向が前回調査から継続して見られました。一方、国公立大学や研究機関では研究開発費の男女差が小さくなる、女性の役職指数が50歳代で頭打ちする傾向が若干改善されるなど、前回調査より男女差が縮まりつつある傾向も見られました。

子育てについては、男女とも理想の子供の数が実際の子供の数を大きく下回る傾向を示し、その理由として女性は「育児とキャリア形成の両立」、男性は「経済的理由」を最も多くの方が挙げました。未就学児～中学生の子供をもつ女性の在職場時間が短かったことか

らも子育てのために仕事をセーブせざるを得ない状況がうかがえます。一方、男性の場合、在職場時間は子供の年齢にほとんど影響されないものの、年収と子供の数に強い相関が見られ雇用形態との関係がうかがえます。育児休業取得者の数は前回調査より増加していることから、環境整備や職場の理解が進んでいることがわかります。今回新規項目として追加した介護に関する設問では、男女とも3割が介護が必要な家族がいると回答しました。介護休業制度の認知度は高く40歳代後半以降では70%近くの方が認知していることから介護は性別を問わず多くの方が直面している問題であることがわかります。

大学や研究機関では任期付き職の割合が高くなっていますが、物理系や生物生命系では男女差が大きい(女性の任期なし職の割合は男性より10%以上低い)のに対し、化学材料系では男女差はほとんどありませんでした。前回調査と比較して、任期付き職を経験したことがない男性の数が大幅に減少したこと、男女とも任期付き職を10年以上続けている割合が倍増したことなどが特徴的でした。

自由記述では、「女性研究者比率○パーセント以上」といった数値目標を有効と捉える意見がある一方で否定的な意見も多く見られました。男女ともに育児や介護のライフイベントを乗り越えて長く仕事を続けることができる社会環境の整備や支援を求める声が多数ありました。

今回ご紹介できたのは結果の一部です。第三回大規模アンケートの詳細な解析結果は、http://annex.jsap.or.jp/renrakukai/doc_pdf/2013/3rd_enq/3rd_enq_report130918.pdfからPDFファイルをダウンロードしてご覧いただけます。全142ページの大作となっていますが、仕事や私事の合間に少しでもご覧いただければと思います。

本稿でご紹介した内容は、『第三回科学技術系専門職の男女共同参画実態調査』男女共同参画学協会連絡会(2013)に基づきます。